

氏名 (本籍)	モハジャ　　ヴァ　ペサラン　　ダフネ MOHAJER VA PESARAN DAPHNE (カナダ)
学位の種類	博士 (被服環境学)
学位記番号	博甲第 54 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文化学園大学学位規程第 5 条第 1 項該当
論文題目	Making and Growing <i>Washi</i> Paper Clothes: A Framework for Interspecies Fashion Design in the Anthropocene
論文審査委員	(主査) 教授 高木 陽子 教授 米山 雄二 教授 高橋 正樹 教授 Clemens Thornquist (スウェーデン ボラス大学)

論文内容の要旨

21 世紀に入り、地球温暖化の人為的原因が究明されるようになり (Rosenzweig et al. 2008; Oreskes 2004; Thomas et al. 2004; Crutzen 2002)、「アンスロポセン (人新世)」という時代とその概念が定着しつつある。ノーベル化学賞を受賞したドイツ人の大気化学者、ポウル・ジョゼフ・クルツェン (Paul Jozef Crutzen, 1933-) によって提案された造語アンスロポセンとは、人類が地球の気候や生態系に大きな影響を及ぼすようになった約 11,000 年前から現在に至る地質時代をさす。

諸学問領域でこの新しい時代をめぐる議論が巻き起こり、人為的気候変動を背景に、近代化の過程の一側面、つまり無限の成長の問題や危険性が明らかになり、解決の必要性が高まっている。しかし、資源を乱用するブラックボックスと形容されるファッション産業界が、自然界といかに関係しているかは明確になっていない。サステナブル・ファッション・デザインの研究者たちは、大量生産を加速する現代のファッション産業界に倫理的問題や環境問題に対処する早急な改革を求めている。サステナブル・ファッションの対策として「資源の低減」(Rissanen and McQuillan 2016) や「スローファッション」(Minney 2016) が提案されたが、問題を根本的に解決するためには不十分である。したがって、改革を期待する研究者たちが納得できるようなファッションデザインの具体的な方法は、いまだ提案されていないといえる。

本研究の目的は、ファッションデザイン領域からこの問題を解決するために、ファッションの役割や自然界との関係を分析し、アンスロポセン時代のファッションデザイン制作活動のための新たな理論と概念の枠組みを構築し提案することである。

本研究では、まず、環境を汚染する近代のファッション産業を下支えしている理論と概念の枠組みを徹底的に理解することから始めた。近代のファッション産業界の偏りを深く理解

することによって「ファッション」と「地球の生態系」との関係を再評価し、アンソロポセン時代に相応しいファッションデザインの発想法と生産方法を開発するためである。

本研究の問題提起に関する代表的な研究をあげると、サステナブル・ファッション・デザインの先行研究を分析したカッターロールが「急進的な制度革新が必要となり、独立したアクターによる草の根運動的な活動が有効だろう」と主張している (Catterall 2017)。しかし、ファッション産業界を改革へ導く消費者に関する先行研究はまだ数少なく、それらの研究はファッション産業界をミクロに捉えており、自然との関係を俯瞰する視点がない。

そこで、本研究では、哲学、批評理論、人類学、認識論などの領域で「人間」と「生態系」の関係とその意味を論じる学際的な先行研究 Stengers (2010)、 Haraway (2016, 2011, 2007)、 Ingold and Hallam (2016)、 Kirksey (2015)、 and Morton (2010, 2007)などを参照した。

本論文が提起する問題を解決する鍵は、近代化以前から人間が簡素な道具を使って、自然のなかで行うものづくりの方法にある。取り上げるのは、日本で、衣服を含む多様な日用品の素材として使われてきた和紙である。本研究では、約2年をかけて日本の和紙生産地の6ヶ所（宮城県白石市、埼玉県小川町、岐阜県美濃市、福井県越前市、京都府黒谷町、高知県土佐市）[1] で、紙子や手漉き和紙に関する現地調査を行った。調査地では、共同体組織者、職人、アーティスト、デザイナー、楮農家、諸和紙関係者にインタビューを行い、人と自然、生産者と消費者が関わる和紙製作の多様なあり方と原材料の処理から紙加工までの生産過程を参与観察した。

現地調査で収集したデータを分析することにより、以下の論点が浮か上がってきた。まず、本論が目指す新しい枠組みを構築するためには、環境汚染の源になっている近代ファッション産業における2つのヒエラルキー、つまり、消費者に対する生産者の優位性 (Producer's primacy over consumer)と自然界に対する人間の優位性 (Human dominance over nature)という常識を疑うことから始めなければならないと気付いた。

また、伝統的に継承されてきた和紙づくりの方法と制作から生産までの過程には、ファッション領域外で盛んに提案されるようになってきている先端的なものづくりの仕組み、消費者・生産者 (Consumer-producer)、異種間共同制作 (Interspecies collaboration)、公開性 (Openness)、透明性 (Transparency)が、既にすべて含まれていたことを発見できた。そこから、人間と非人間を含めた異種間のコミュニティーにおける共同制作という本論文独自のフレームワークを発展させることができた。アンソロポセン時代におけるヒエラルキーの優位性を回避する鍵となるのは、この人間を含めた異種間共同制作の考え方であろう。

さらに、和紙の制作方法を、コラボレーション、公開性、透明性といった最近の傾向を踏まえて再定義することによって、「生物学」と「社会」と「技術」を結びつけるマクロの観点に到着することができた。

本論文では、以上の論点を1章から4章に分けて分析した。

第1章「ファッションにおけるヒエラルキー:生産者対消費者と人間対自然界 (Hierarchies in Fashion: Producer over Consumer and Human over Nature)」では、まず、先行研究の理論と概念の枠組みを整理し、現行のファッションの生産が地球環境に悪影響を及ぼす原因は、2つのヒエラルキーにあることを示した。現代の消費者に対する生産者の優位性と自然界に対する人間の優位性の輪郭を描き、人間至上主義を支える思想を検討し、2点を明確にした。一点目は、現在、消費者は環境を改善をしたくても、生産過程に参加できない、つまり生産過

程にエージェンシーをもたない。この現象の原因を調査し、「デザイナー」と「生産者」そして「消費者」のヒエラルキーを回避するような革新的な生産と消費の方法が必要だと結論づけた。二点目に、自然界に対する人間の優位性を支える理論を整理し、キリスト教の神が人間をその他の生物の長として地球を統べるべく創造し、地球が宇宙の中心から落とされたコペルニクス的転回以降になっても、人間は地球の生態系の支配者と考えられてきたことを確認した。この支配関係は、ファッション産業界にも反映しており、特に自然界を傷つける原材料の採取と加工にみられると結論づけた。

第2章「ユートピアをデザインする：社会とテクノロジーを架橋する (Designing Utopia: Bridging the Social and Technological)」では、まず20世紀初めには必要に応える存在であったデザインが欲望を追求させるものとなる変遷を示し、今日、デザインは「社会を批判する」役割をになっていることについて論じた。次に、アンソロポセン時代が一般的なデザインにはどのような影響を及ぼすかを明らかにしてから、サステナブル・ファッション・デザインに焦点を絞った。本研究の中心となる二つのヒエラルキーを理解するために、柳宗悦やウィリアム・モリスなどの評論家、デザイナーの著作から、「ソーシャル・デザイン (Social Design, Design for Social Innovation)」と「エコロジカル・デザイン (Ecological Design)」についての先行文献をレビューし、また「技術」と「社会」が交差する学際的研究文献も考察した。本章では、持続可能なファッションデザイン発想には「社会」と「技術」を結びつけることが必要であることを結論とした。

第3章「自分たちでやる：コミュニティーにおける消費者の行為主体性 (Do it Yourself: Consumer Agency Through Community)」では、消費者のエージェンシーに注目し、消費者の生産過程におけるエージェンシーを取り戻すプロジェクトや活動を取りあげて学際的に分析した。和紙の生産工程のコミュニティーや共同制作も分析した。その結果、先行研究や一次研究から3つの中心的な特徴—共同制作、公開性、透明性—を発見した。新しいコミュニティーにおける技術と社会的な面を結びつけるデザインや生産の方法の進歩に、これらの特徴が欠かせないことを示した。

現在では、先端的な消費者は一般的なファッション業界を迂回し、新たな消費方法を考案している。例えば、ビットコイン、シェアリング、共同組合、自営業製作所、メーカースペース、共同プログラミングなどのような新しいテクノロジーと人間関係の交差と発達によって、消費者が「ハッカー (Hacker)」、「メーカー (Maker)」、「消費者・生産者 (Consumer-producer)」という立場を同時に持つようになっている。そして、消費者・生産者はアートとデザインの異種間共同制作の理解度を高める効果もあると結論づけた。「シェアリング・エコノミー (Sharing Economy)」における消費者が誘導する活動と、異種間共同制作・デザインの方法を交えることにより異種間の関係を等しくし、アンソロポセン時代のファッション・デザインの方法の創設を目指した。

第4章「自然との関係を通じてファッションを育てる (Growing Fashion Through Relationships with Nature)」では、自然界の原材料を「利用すること」なしに自然界の生物と「一緒に」ものを作り育てる方法を論じ、結果として、如何にファッションを「考え」、「実践するか」のフレームワークを提案した。

まず、環境に悪影響を及ぼしているファッション産業を下支えしているヒエラルキーを回避するために、ファッション製品を生み出している非人間生物を考察した。次に、「バイオ

アート」と「バイオデザイン」のコンセプトで異種間共同制作している作家やデザイナーとその作品や製品を分析した結果、多様な活動が行われているのに、ファッションデザインに応用できる方法や理論の枠組がまだ存在していないことを明らかにした。

次に、「コミュニティ」の定義を拡大し、異種間も含めたコミュニティではどのようなものづくり文化が生まれるのかを考察し、そのプロセスや製品を検討した。異種間の共同制作を理解するために、自然界の原材料あるいは動植物のような非人間生物を「利用すること」なしに、自然界の生物と「一緒に」ものを作るような方法を追求し、次の問いを提起した：一般的なファッションの素材生産や造形で行われている原材料の「採取 (Extracting)」と「加工する (Processing)」方法の代わりに「培養 (Nurturing)」と「成体 (Forming)」することはできるだろうか。

上記の問いに答えるために、「人間と自然界」のヒエラルキーを問題化させるアートとデザインの異種間共同制作の理論と実践を考察し、2つの方法、「作る (Making)」と「育てる (Growing)」について再考し、これまでのデカルト的二元論を問題化し、そして異種間共同制作の基本的なメカニズムについて考察した。宮城県白石市の和紙紙子文化と同時に現代のアートやデザイン活動、ワインとチーズと同様に、ファッションの素材(布や繊維)にもテロワールが現れる可能性があることを提示した。

第5章「結論とディスカッション」では、1章から4章のテーマを関連づけ、最終的にアンスロポセン時代における持続可能なファッションを作るため、急進的にファッション産業界を改革する提案として、草の根から改革へのフレームワークを構築した。共同制作に関する先行研究では、異種間共同制作の視点が欠けていた。本研究では、ファッションデザインの有効な方法は異種間の共同制作であり、近代のファッションのヒエラルキーへの打開策を実地するために「社会」と「技術」的な面を結びつけることが肝心であることを示した。

ファッション産業界の改革のためには消費者は、消費行動で改革を起こすのではなく、異種間共同制作、公開性、透明性を通して、「ハッカー」、「メーカー」、「消費者・生産者」という立場を同時に持つようになる。消費者は、自分たちの生産・消費の方法を構築した結果、環境や倫理問題を起こすファッション産業界の生産システムを隠蔽している「ブラックボックス」を迂回することになるという構造をあきらかにした。

本研究の独自の貢献は、人間と非人間生物の共同コミュニティから発生するアンスロポセン時代におけるファッションデザインの方法を育むための新しい理論と概念の枠組みを示したことにある。この枠組みは今後のサステナブル・ファッション・デザインの土台となるファッションと自然界の絡み合いを認識した新しいファッションデザインを生み出すことであろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、ファッション産業の倫理問題と環境破壊問題を背景に、今後のファッションデザイン実践を支える理論を構築しようとした、芸術学を中心とした学際的研究である。

これまでほとんど研究されてこなかったこの問題に対し、カナダのライアンサン大学(学士課程)と文化ファッション大学院大学(修士課程)でファッションデザインを専攻した

Daphne Mohajer va Pesaran は、近代のファッション生産システムを継続し、拡大しつづける現代のファッション産業の問題点を洗い出し、現行のシステムを回避する方法を提示した。

まず、近代のものづくりを支えてきた理論の分析を通して、ファッション産業における持続不可能な実践、すなわち①消費者に対する生産者の優位性と、②自然に対する人間の優位性という2つのヒエラルキーを特定した。それはファッション分野における持続可能性の問題に関する現在の論議に全体的な視点と広範であるが洗練された検討を与えることになった。

「消費者に対する生産者の優位性」の問題に対して、Mohajer va Pesaran は、生産者側にあるファッション生産システムのブラックボックスを回避するために、共同作業、透明性、アクセシブルな技術の3要素を提案し、多様な活動を通じて両者のバランスを再考し改善する方法を探求した。

「自然に対する人間の優位性」の問題に対しては、よりバランスがとれた異種間の共同作業の例として、古より簡素な道具を使っておこなわれてきた和紙生産のコミュニティーを参与観察し幅広いインタビューを収集し分析を行った。自然資源の栽培に関連した具体的な実践と理論的概念の橋渡しに成功したことにより、本論文は、芸術とデザイン領域が、倫理的および生態学的問題を取り扱う道を開くことになった。

本論文は、芸術学を基本としつつ、ファッションに関する倫理的および生態学的問題についての、多くの異なる理論的視点に対応するために、極めて幅広いアプローチを取っている。学問領域としては芸術学、デザイン学、建築学、生物学、批評理論、人類学、テーマとしてはDIY、ソーシャルイノベーション、ハッキング、共同設計、スペキュラティブデザインモデルなどを扱っている。また、理論的思考と実験的研究との間、そして具体的な設計空間と設計プロセスの抽象的な概念との間を行き来しながらブリコラージュの方法論を採用している。

これまでファッションのサステナビリティ研究の焦点は、生産者あるいは消費者のどちらかに偏っていた。本研究は、両者を統合する2点の重要なポイントを与えてくれた。つまり消費者に対する生産者の優位性の識別、そして共同制作、公開性および透明性に基づく人間と非人間生物の異種間共同制作の枠組みの提案である。以上をとおして、本論文は、ファッション業界の既存の、そして支配的な概念や実践に挑戦するとともに、ファッションデザインの変化を促進する役割も果たしている。成果は、精巧な論文にまとめられており、今後、草の根運動のための政策作りとインスピレーションの指針となることが期待できる。

近年、様々なデザイン領域で、いかに近代を克服するかが試行錯誤されてきた。その結果、近代のものづくりを対処的に修正する発想には限界があることが明らかになると同時に、理論構築が求められるようになってきている。本論文は、このようなポストモダンのデザイン諸領域が抱える問題に貢献する可能性を有する。これまでファッション領域は、建築や工業デザインの理論を応用してきたが、本論文は、ファッション領域側から周辺領域にインパクトを与える初めての例となるかもしれない。

今後、ファッション・デザイナーたちが、本論文の枠組みを応用して先進的なものづくりを展開することになるだろう。本論文はまた、ファッション関連企業が、現状を改善する手引きにもなるだろう。また、著者自身が、この理論に基づく作品を制作することになるだろう。これまでの多くのデザイナーたちは、自分の作品の創造の秘密となる理論を事前に明かしたがいなかったが、Mohajer va Pesaran は、あらかじめ論文の形で理論を公開することで、自らシェア

リングを実践しているわけでもある。

以上、本論文はアンソロポセン時代における持続可能なファッションを展開するため、ファッションデザインの新しいフレームワークを構築するものであり、博士（被服環境学）の学位論文として十分価値のあるものと認められた。